

# 国語科教育における高大接続のための教材開発

## Development of Teaching Materials for Japanese Language Education in Connections between High school and University Education

金井 昌平<sup>※</sup>

Syouhei Kanai<sup>※</sup>

### Abstract

Under the current language guidelines for teaching, the contents of study are defined as “matters related to traditional language culture, and national language characteristics”. Learning activities are being conducted at junior and senior high schools accordingly.

At high schools in particular, the curriculum has been diversified in recent years. Learning experiences and the learning needs of students who continue to university are also diversifying, and it is necessary to set subjects according to the individual proficiency level of students.

I am developing new teaching materials and working on my Japanese language education at university, so that the knowledge students gained at high school can be deepened and used effectively.

キーワード：国語教育、高大接続

## 1. 目 的

現在の国語の学習指導要領においては、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」として古文・漢文の学習についてその内容が定められており、特に中学校・高等学校等においては「我が国の言語文化を享受し継承・発展させるため生涯にわたって古典に親しむ態度を育成する指導を重視する」ことが求められている。

しかしながら、高等学校等においては、近年特に多様な学科・類型が設置され、国語学習に関する選択科目、配当時間も様々であり、学習内容及び基礎的知識の修得及び習熟状況においても多岐にわたっているのが事実である。

このような中、大学へと進学してきた学生の学習経歴や学習ニーズは近年においてよりいっそう多様化しているのが実態である。

そこで、これらを背景とした後期中等教育における知識・技能の習熟状況を踏まえると大学における古典に関する教養科目の場合は以上のような現状を踏まえた授業構成及び教材の選定が必要とされる。

このため、筆者は大学の講義においても常に教科における「高大接続」を念頭において「学びやすい教材の作成」「学生の言語生活の充実と発展」を目指すとともに単元学習の手法を導入することを試みている。

---

<sup>※</sup>日本経済大学経営学部経営学科

さらに、言語文化のみならずわが国の様々な伝統文化への理解及び興味・関心を喚起し生涯にわたって主体的にそれらに触れていく姿勢を涵養することを目的としなければならない。

これらのことを念頭に置いた授業展開を考え合わせると筆者は先述のように既存の教材の活用のみではなく新たな教材開発が必要であると考えその実践に当たっているところである。

## 2. 教材作成の経緯

古典教育に関しては、平成24年に文化庁が「古典の日」を法令で定めたことにより学校教育においては更なる具体的な取り組みが望まれているところである。

この「古典の日に関する法律」においては「学校や地域における古典に関する学習活動の実施や、展覧会、講習会、研究発表会等の各種イベントの開催等を通じて国民が古典に親しむための施策を講ずるよう努められたいこと。また、関係機関・関係団体においても自主的かつ主体的に、これらの機会の提供等につとめられたいこと」とある。

そこで、後期中等教育等における既習の内容を踏まえ、大学初年次に取り組むものとして現代文と古典を交えた融合文章を創作すること及び古典に題材を得た短文を作成し教材として用いることで、親しみやすくより分かり易く日本の伝統文化や固有の感性にも触れさせながら幅広い教養の取得を目的とし、将来的に彼らが主体的にそれらに触れようとする姿勢を形成することを目標としている。

## 3. 単元学習の概念

大学教育においても定められた15回の講義の中で達成感のある授業展開を可能とするためには単元学習の概念の取り入れとその実践が必要とされる。このためのひとつの方法として、既存の文学作品等を踏まえながら新しい学習教材の開発等を行っていく手法に現在取り組んでいるところである。以上のような考えのもとに筆者は「伝統的文化及び文学に触れる単元学習」について、以下のような定義付けを行った。

- ①作品を通して現代にも相通じる思想や風習をがあることに気付かせ、それについて考えさせ意見を発表することで思考力を養うことを目的とする。
- ②一つの作品の中で可能な限り複数の作品にも触れ得るような総合的な教材を用い、できる限り多くの学習者の感性に触れ得るよう配慮する。
- ③一つの作品の終了後にはレポート等を作成させ達成感を感得させるとともに表現力を養うことを目的とする。
- ④社会人としての物事のとらえ方や判断力、言語生活の一つの礎となることを目指す内容とする。

#### 4. 実際の教材作成にあたり活用した出典について

- ①感性をつなぐ心の架け橋「蛍」（拙文）
- ②伊勢物語（四十五段）
- ③後拾遺和歌集 和泉式部昨「もの思へば沢の蛍もわが身よりあくがれいづるたまかと思ふ」
- ④紫式部日記「和泉式部について」
- ⑤源氏物語「蛍」
- ⑥伊勢物語（三十九段）
- ⑦大和物語（四十段）
- ⑧短文「西の京なる女」（拙文）
- ⑨伊勢物語（二段）

#### 5. 単元の流れ 一

ア 拙文「感性をつなぐ光の架け橋『蛍』」を読解する。この文章は蛍の放つ光を題材として古典の中に出てくるさまざまな蛍に関する文章を主に「伊勢物語」「大和物語」の中から選び古典にわかりやすく追ろうとするものである。さらに、文章中に登場する和泉式部の和歌を紹介し、彼女に関して書かれた「紫式部日記」の一節に触れる。さらにその紫式部が「源氏物語」で蛍を登場させている場面を紹介していく。こうして江戸時代の与謝蕪村の蛍を詠んだ句まで時代を追って題材を取り上げ日本人の感性について学んでいくことを目的としている。

学習に入るに際して拙文中の基本的な語句の読解、文学史的知識、基本的な文章読解などの確認を行い授業展開のひとつの指針とする。

ひとつの文章において様々な古典に触れ日本人の感性、伝統文芸への近づきをこの単元の目的としている。

イ 以下に拙文および基本事項の確認の具体例を挙げる。

##### 感性をつなぐ光の架け橋「蛍」（拙文）

蛍は、五月の中頃から七月にかけて日本各地でその神秘的な光を放ちながら初夏を告 1  
 げる①景物として実に多くの人々に待ち望まれています。蛍は世界各地で生息している 2  
 そうですが、意外にも光を放たない種類の方が多いということです。 3  
 ②それはともかく③夜が本来の姿である闇を忘れたかのような明るい町並みが増えた近 4  
 年においてさえも、蛍の放つほの白い光は多くの見る者をして幻想の世界へと誘い、 5  
 ④老若男女を問わず日本人として共通の感性を呼び覚まさせ、いわば不思議な霊力の 6  
 のようなものを持っているような気がいたします。今でさえもこのように見る人を幻想 7  
 の世界へと⑤誘う蛍の光ですが、人工的な明かりのなかった時代における蛍の光は当時 8  
 の人々の目にいったいどのように写ったのでしょうか。⑥星月夜の明るい夜は年を通し 9

て幾夜もありますが、それに蛍が明かり添える夜は一年を通してほんの数えるばかりで 10  
す。 11

桜前線が春の訪れを告げながら北上するように蛍前線もまた初夏の訪れを告げなが 12  
ら北上して行きます。南北に長い日本列島は梅の花がほころぶ時期からこうして数カ月 13  
間を色とりどりの花と蛍の放つ神秘的輝きによって次第に夏の盛りへと導かれて行き 14  
ます。 15

さて、その蛍も一時はその棲息地における急激な開発や⑦環境汚染によって、その生 16  
息数についてかなり⑧危惧された時期もありました。しかし、現在では環境保護や環境 17  
に関する意識の向上と相まって蛍そのものの保護にも力がいれられるようになってお 18  
り、蛍の幼虫の餌になるカワニナの保護にまで手がさしのべられるようになってきてい 19  
ます。また、その棲息地においては、蛍の乱舞する姿を観光のひとつの目玉商品にして 20  
いる所もあるようです。 21

ところで、夜がまだ漆黒の闇であった古代における蛍の光は、人々の目と心にどのよ 22  
うな受け取られ方をしていたのでしょうか。闇夜を忘れつつある私たちとはまた違った 23  
とらえ方や感性があったのではないのでしょうか。そのことを古典文学の中で少し探って 24  
ゆきたいと思います。 25

平安期に書かれた「伊勢物語」や「源氏物語」などはいずれも日本の文学を代表する 26  
作品ですが、この中の蛍は、主役というよりもいわば脇役として登場しているようで 27  
す。 28

伊勢物語の中に第四五段「ゆく蛍」いう章段があります。或るものの情趣を解する男 29  
がおりまして、ある女がその男に人知れず恋をしたわけですが、当時のことですから女 30  
の方からとても打ち明けるといふわけにもゆかず、そのまま思いが⑨募りとうとう 31  
⑩恋煩いをして死んでしまったという話です。男はものの情趣を解する「雅」な男 32  
ですから、その経緯を知らされると、女の家を訪れてしばらくの間その家に留り喪に服 33  
したという話です。時節は現在の七月の終わり、大層暑い時期で、夕暮れは死者を 34  
⑪用うための音楽を催し、深夜に到っては少しずつ涼しい風が吹いてまいりまして 35  
ふと気づくと蛍が空高く舞い上がるのが目に入ったという⑫くだりになっています。 36

この男は、横になったままこの光景を見て「ゆく蛍雲の上までいぬべくは秋風吹く 37  
と雁につげこせ」と歌を詠みます。 38

これは、「空高く風に乗って運ばれ飛んで行く蛍が、もし雲の上まで行くことができ 39  
るのならば、すでに地上には秋風が吹いているよと秋を告げる鳥である雁に伝えておく 40  
れ」という意味になりましょう。蛍に亡き人の魂を連想し、雁を女の靈魂を乗せて帰っ 41  
て来る鳥にみたてて、できるなら戻ってきてほしいという思いなのかもしれません。見 42  
も知らぬ女が自分に想いを寄せてくれたというだけで⑬ここまでのしぐさをする 43  
のが当時の「雅」な男の⑭真骨頂とされたのでしょうか。 44

ここでは蛍は亡き人の魂に見立てられています。 45

さてもうひとつ例を挙げさせていただきます。伊勢物語より時代はやや下りますが、  
⑮和泉式部の歌に「物思へば沢の螢も我が身よりあくがれ出づるたまかとぞ見る」（後  
拾遺和歌集）という作品があります。彼女が離れゆく男の気持ちをつなぎ止めるために  
貴船神社に詣でたときの作品だとされています。その際に⑯境内の池の上を飛ぶ螢を見  
て、その螢をつれなくなった人を恋するあまりに我が身から遊離した自己の魂に見立て  
ています。彼女の代表作の一つに数えられる作品ですが、ここでの螢は恋多き和泉式部  
の情念の強さを不気味なまでに象徴する存在として歌われていて和泉式部の才の豊か  
さや感性の鋭さを感じざるを得ません。

しかながら、同時代の女流作家である⑰紫式部は、「紫式部日記」の中で和泉式部の  
ことを「歌は確かにちょっと上手なところもあるが、多くは感情任せに口をついてでき  
た作品が多く、歌作の流儀や伝統などには通じておらず、つまるところたいした歌詠み  
とは思われない」と酷評しています。但し、これは同じ宮廷に仕える才女としてのライ  
バル意識が根底に見え隠れする言葉だと考えるのが適切かもしれません。

ただ、その紫式部もまた源氏物語五十四帖の中に「螢」という章段で螢を題材とした  
和歌をのこしています。この「螢」の章段は、玉鬘たまかづらという光源氏の養女となった姫君  
に恋慕する兵部卿宮ひょうぶきょうみやが「鳴く声も聞こえぬ虫の思ひだに人の消つには消ゆるものか  
は」と迫ったところ、玉鬘は「声はせで身をのみこがす螢こそいふよりまさる思ひなる  
らめ」とさりとかわす名場面で見られています。兵部卿宮の歌中の「虫」は螢のこと  
を指していて姫君への燃える思いを歌に託しています。それは「思ひ」の「ひ」が  
「火」と掛詞となっていることから分かります。この和歌だけ見ますと伊勢物  
語や和泉式部の和歌と同趣向のような気がしますが、紫式部は、そのくだりに至る直前  
に見事な⑱伏線を張っています。それは源氏が予め隠し持っていた多くの螢を突然玉鬘  
の部屋に放ち、姫君のおやかな美しい姿を兵部卿宮に見せて彼の恋心をいっそう募ら  
せるという場面を設定しているのです。螢の光に一瞬あらわとなった玉鬘の姿を見て宮  
がいっそう恋の⑲虜こゝろとなってしまったことは容易に想像されましょう。玉鬘はまだ若き  
ころの源氏が恋をした夕顔の娘で源氏の恋や出世競争などの全てにわたっての好敵手  
である頭中将の実の娘でもあります。螢の章段では源氏は三六歳になっていますが源氏  
自身、この夕顔の面影を宿す玉鬘への恋心に苦悩していることも併せ考えると事は単純  
では済まされないのですが、いずれにしろ螢をみごとな演出に使っているところが紫式  
部の⑳手練たるどころだと改めて感心してしまいます。

最後に時代はさらに下り江戸時代ともなると「狩り衣の袖の裏はふ螢かな」（蕪村）  
という名句が思い浮かびます。貴人のまとう薄絹に透けて見える螢の光にさらに着物の  
絵柄の美しさまでもが連想されるまさに画人としての㉑与謝蕪村の㉒面目躍如たる句  
であります。十七文字に見事な王朝絵巻を見た思いがいたします。

現代の私たちもそれぞれの思いの中で螢狩りを楽しむわけですが、㉓古典文学のなか  
に描かれた螢の光と陰の部分ひかりとかげのぶぶんを念頭において鑑賞するのもまた一興です。

「蛍」は文字としてだけではなく古代の人々と現代に生きる我々とを日本人としての 82  
 共通の感性でつなぐ光の架け橋でもあるように思えてなりません。 83

ウ 以下に基本事項の確認をした項目を挙げる。解答者数98名であった。

- ①「景物」の a 読み方と b 言葉の意味を示せ。
- ②「それはともかく」が指し示す内容を示せ
- ③「夜が本来の姿である闇を忘れたかのような」という箇所を用いられている修辞法は何か答えよ。
- ④「老若男女」⑤「誘う」⑥「星月夜」(ほしづきよ以外)の読み方を示せ。
- ⑦「環境汚染」についてこの場合はどのような現状が想定できるかについて示せ。
- ⑧「危惧」⑨「募り」⑩「恋煩い」⑪「弔う」の読み方を示せ。
- ⑫「くんだり」とはこの場合はどういう意味か。簡潔に示せ。
- ⑬「ここまでのしぐさ」とはこの場合はどういうことを指示しているか。説明せよ。
- ⑭「真骨頂」⑮「和泉式部」⑯「境内」⑰「紫式部」⑱「伏線」⑲「虜」⑳「手練」
- ㉑「与謝蕪村」㉒「面目躍如」
- ㉓「古典文学のなかに描かれた蛍の光と陰の部分」とはこの場合どのようなことをいっていると思われるか。簡潔に説明せよ。

エ 拙文の28行目までの解説を行う。次にその具体例をいくつか挙げる。

- ガス灯、アーク等から現代に至るまでの光の歴史について解説を行う。
- 全国の梅の開花、桜前線、蛍前線についての解説を行い我が国の春から初夏への季節の移り変わりがいかに自然の風物とともにあるかについてあらためて考えさせる。  
 学生たちは多くの中学や高校とは異なり全国から進学してきているので、それぞれの地における季節のとらえ方についても語らせる。
- 現代のように24時間店舗営業が行われている時代に暮らす学生たちに明かりのなかった時代における生活について思いを馳せらせる。

オ 以上を踏まえて、伊勢物語四十五段「行く蛍」を文中に挿入し古典文学の鑑賞をする。

具体的には拙文29行目を改定したものを提示して古典の鑑賞をした。以下にその当該部分を掲載する。

**【具体的な挿入部分】**

伊勢物語の中に第四五段「ゆく蛍」いう章段があります。まず原文を提示してみます。原文のままでも大変分かり易い文章です。

むかし男ありけり。人のむすめのかしづく、いかでこの男にもいはむと思ひけり。うちいでむことかたくやありけむ、もの病みになりて、死ぬべき時に、「かくこそ思ひしか」と

いひけるを、親、聞きつけて泣く泣くつりければ、まどひ来たりけれど、死にければ、つれづれとこもりをりけり。

時は六月のつごもり、いと暑きころほひに、宵は遊びをりて、夜更けて、  
やや涼しき風吹きけり。蛍高く飛び上がる。

この男見臥せりて、

ゆく蛍雲の上までいぬべくは秋風吹くと雁につげこせ

暮れがたき夏のひぐらしながむればそのこととなくものぞ悲しき

或るものの情趣を解する男がおりまして、ある女がその男に人知れず恋を（以下省略）

カ この部分の学習については、古典の部分だけを配布して拙文を参考して現代語訳をつけさせた。学生の反応としてほぼ全文のあらすじを拙文中に記載しておいたためかなり理解がしやすかったようである。

最後に、この箇所での「蛍」がある意味に亡き人の霊魂に見立てられていることを確認する。

キ 和泉式部の「物思へば沢の螢も我が身よりあくがれ出づるたまかとぞ見る」について鑑賞し、この場合の蛍が自己の魂であることを認識させて、蛍についての象徴的な見方にも様々とあることを実感させる。

さらに、拙文58行目から一部改訂して「紫式部日記」中から和泉式部について書かれた箇所を抜粋し挿入して古典の鑑賞をしていく。

#### 【具体的な挿入部分】

ここで実際の「紫式部日記」の和泉式部について書かれた箇所に触れてみたいと思います。

「和泉式部といふ人こそ、おもしろう書きかはしける。されど、和泉はけしからぬかこそあれ。うちとけて文はしり書きたるに、そのかたの才ある人、はかない言葉のほひも見え侍はべるめり。歌は、いとをかしきこと。ものおぼえ、歌のことわりまことの歌よみざまにこそ侍らざめれ、口にまかせたることどもに、かならずをかしき一ふしの、目にとまるよみ添へ侍り。それだに、人の詠みたらむ歌難じことわりゐたらむは、いでやさまで心は得じ、口にいと歌も詠まるるなめりとぞ、見えたるすぢには侍るかし。恥づかしげの歌詠みやとはおぼえ侍らず。」

文全体を見てみますと、和泉式部のことを持ちあげてみたり、酷評したりでまさ感情任せに書かれているような気さえ致します。日記文ですから確かにそのようにいえるのかもしれませんが。

この箇所において授業のはじめに古典の部分を配布して現代語訳をつけさせてみたが、現代文での内容について触れていたわけではないので、伊勢物語の時とはことなりかなり苦勞していたようである。そこで逐語的に丁寧に解説した。

さらに補足内容として次の和歌を紹介した。恋というものは千年の時をへても何ら変わらない情感について理解させる試みを行い学生たちに恋愛観について意見を述べさせた。

黒髪の手すちの髪のみだれ髪かつおもひみだれおもひみだるる

和泉式部 後拾遺和歌集

黒髪の乱れも知らずうち臥せばまづかきやりし人ぞ恋しき

与謝野晶子

世の中に恋といふ色はなけれどもふかく身にしむものにぞありける

和泉式部 後拾遺和歌集

ク 源氏物語の「螢」については源氏物語の原文の挿入は行わず内容及び二つの螢の和歌に関する説明にとどめる。ただし、この源氏物語の螢の文中における役割については同趣向のもの（暗闇の中で女性の姿を露わとするために螢の光を用いること）が「伊勢物語（三十九段）」に見ることができるとして拙文の75行目から次のようにを挿入して拙文を展開した。

【具体的な挿入部分】

ただし、この紫式部の独創的ともいえる螢を小道具として用いた箇所も実は「伊勢物語」（三十九段）の中にすでに螢が似たような形で使われていることを是非とも紹介しなければなりません。「源氏物語」は「伊勢物語」着想を得て書かれた部分があると言われていますがその一つの具体例であるとも考えています。

むかし、西院の帝と申すみかどおはしましけり。そのみかどのみこ、たかい子と申すいまそがりけり。そのみこうせたまひて、御はぶりの夜、その宮の隣なりける男、御はぶり見むとて、女車にあひ乗りていでたりけり。いと久しう率ていでたてまつらず。うち泣きてやみぬべかりけるあひだに、天の下の色好み、源の至といふ人、これももの見るに、この車を女車と見て、寄り来てとかくなまめくあひだに、かの至、螢をとりて、女の車に入れたりけるを、車なりける人、この螢のともす火にや見ゆらむともし消ちなむずるとて、乗れる男のよめる。

いでていなばかぎりなるべみともし消ち年経ぬるかと泣く声を聞けかの至、返し、

いとあはれ泣くぞ聞ゆるともし消ちきゆるものともわれはしらずな

天の下の色好みの歌にては、なほぞありける。至は順が祖父なり。みこの本意なし。

ここでもやはり、螢は暗闇の中において女性の姿を露わにするための小道具として使われており「源氏物語」に先立つものとして色彩を放っていることが分かります。



ケ 「伊勢物語」(三十九段)の原文を配布し、現代語訳をつけさせ解説する。節分中の「源氏物語」の蛍を小道具として用いられているところとの共通性を説き、そこまで登場した蛍が人の魂の象徴として描かれているものとの相違について学生に意見を求めた。

コ ここでもう一つ蛍を扱った作品として「大和物語」(四十段)を紹介する。少女の身からあふれ幼い恋心を蛍の光に詠み込んだもので新鮮さが感じられる。以下のように拙文に原文を挿入して鑑賞する。

さて、今までは恋の達人たちが登場する作品を扱ってきましたが、次の「大和物語」(四十段)のように幼い恋心を表した蛍を紹介してみます。大和物語もまた伊勢物語とともに歌物語と言われるジャンルに属する同時代の作品です。

桂のみこに、式部卿の宮すみ給ひける時、その宮にさぶらひけるうなゐなむ、この男 宮をいとめでたしと思ひかけ奉りけるをも、え知り給はざりけり。蛍のとびありきけるを、「かれとらへて」と、この童に宣はせければ、汗衫の袖に蛍をとて、つつみて 御覽ぜさすとて聞こえさせける。

つつめどもかくれぬものは夏虫の身よりあまれる思ひなりけり

いかがでしたでしょうか。

ケ 与謝蕪村の王朝文学に登場する蛍を絵画的に表した名句を紹介する。きわめて素晴らしい句であるが、一方では、前出の大和物語の「汗衫の袖に蛍をとらへて、つつみて御覽ぜさす」の箇所に通じるものがあり、日本の伝統的文化に気付かせる。

## 6. 単元の流れ 二

この「伊勢物語」第二段は高等学校の正課授業及び課外等でも取り上げられることが少ない章段であるが、この短い章段の中におおよその時代背景、当時の都の様子、季節、時間、そして主人公の男の心情と性格などが盛り込まれており、以降の章段のひとつの象徴的な章段ともいえると考えている。

そこで、原文に加えて、文中の主人公の男を業平に擬して薬子の乱による一時的な不遇、奈良遷都の理由、長岡京から平安京遷都の理由、男が高貴な家柄の出身であること、和歌の達人であり雅な心の持ち主であること、二条の後高子との恋愛事件から東下りに到るまで原文の二段にはない要素を書き加えて伊勢物語の入門的な短文を作成し教材とする試みをした。

とくに、文末の「東下り」については高等学校等で既習の教材であることを踏まえて教科における「高大接続」を意識したものとなっている。

以下に拙文及び原文を紹介しておく。

「西の京」なる女（拙文）

昔、ある男がいた。その男は風雅な振る舞いを旨として、しかも歌才もかなりのものがあったようである。元来高貴な出自でもあったらしい。

時は、八十年にわたり栄えた奈良の都ではあったが、寺社勢力の拡大によりその存在自体が帝の親政を脅かすまでとなり、それを忌みた帝がついに遷都を決意された頃のことである。

一旦は長岡に都が定められたものの思わぬ水害や疫病の流行などに見舞われ、たいそう驚き事態を恐れた帝が密かに頼りとしている陰陽師に占わせ、彼の進言により丑寅の方角に再び遷都することを決意されたのであった。噂によると無実の罪を着せられた皇族の一人が抗議を意図して絶食の後餓死したという痛ましい事件があったが、何でもその怨霊の祟りだというのだ。ともかくも長岡京はわずかに十年あまりしか続かなかったのである。

さて、新しく定められた都とは言わずもがなその後千年続いた京の都であるが、当時はこの山城の国の一帯はまだ荒涼とした土地であった。

先ほど、男はかなりの家柄の出でたと述べたが、人づてによるとやんごとなき方の血筋を引くものであったらしい。しかし、彼の祖父にあたる貴人がこともあろうにこのできたばかりの京の都を再び奈良に戻そうとして内乱を起こし、こともなげに制圧されたという事件が起きた。一族はその政争の中に巻き込まれ、男の父と兄は遠く大宰府の地に左遷され、彼自身もこの先の立身出世の道は閉ざされ、どうやら市井に紛れてひっそりと暮らしていたようである。

この新しき都も当初のうちは突然の遷都のためか帝のお暮らしになっている内裏や貴族たちの建物はようやく出来上がってはいるものの人々の暮らしぶりがまだ落ち着いたとはとても言い難いものがあったようである。

特に右京、つまり朱雀通りから西側の地域は民家とていまだまばらであり、夜ともなるとその寂しさはいっそうであった。

そのような人寂しげな所にある女が住んでいた。素性については知る由もない。

女は、人並外れて美しいというわけではなかったが、彼女の口調や物腰になんともいえぬ品があり、自ずからその素養の高さが自然とうかがえるそのような女性であった。そういう彼女もとには以前から密かに通う男がいたようである。

ところが、こともあろうに先ほどの男が巷でこの女の噂を聞きつけ、ひとかたならぬ興味を抱いたのであった。今の男の立場と街の様がそういう思いに駆らせたのかもしれない。男は確かに躊躇もしたが、自らの心を抑えることもかなわず、ついに女の侍女を介して彼女のことを垣間見てしまったのであった。女は物静かな様で植え込みを眺めてたが、あたかも行く春を惜しむかのような愁いを含んだまなざしに男はすっかり心を奪われてしまったのであった。

男は不遇の中にも決して風雅なる趣を忘れることはなかったが、それとともに生まれながらに

何事に対しても実直なる心も持ち合わせていた。彼は今やなじみとなった侍女を介して自らの思いを女に告げた。先も述べたように女も決して独り身というわけではなかったため男の思いを受け止めるには大いにためらうものはあったが、この男の寄せる歌にみて取れる一途な思いと理由は分からぬものの歌の根底に流れる高貴さに深く心惹かれるものがあったのだろう。ついにある日、意を決して男を家の中へと入れたのである。

時は四月の初旬頃であった。桜は早くも葉桜となり、その葉を濡らす春雨がしとしと降るある晩の出来事であった。

二人は、灯とてない母屋の中で時の経つのも忘れて互いの来し方を語り明かしたのであった。短夜の春の時は瞬く間に過ぎてゆき、名残は尽きせぬ中に行く末を語る暇もなく男は夜が白み始める前に女の家を後にした。

自らの家に戻った男は夜が明けるのを待って歌を詠んで女のもとによこした。

起きもせず寝もせで夜を明かしては

春のもととて眺め暮しつ

起きていなくてもなく、かといって寝るのでもなく、昨夜のことを胡蝶の夢のように感じながら一夜を明かした末に春の季節ならではのこの長雨に一日中ただぼんやりとあなたのことを思いながら時を過ごしてしまったものです。と

女はその後間もなく思いもよらず内裏にて帝の近くにお仕えする身となり、男にはどうすることもできずに失意の中に東国へと旅立ち都をあとにしたのであった。

「伊勢物語 二段より」

#### 伊勢物語 二段 原文

むかし、男ありけり。奈良の京ははなれ、この京は人の家まだ定まらざりける時に西の京に女ありけり。

その女、世人にはまされりけり。その人、かたちよりは心なむまさりたりける。ひとりのみもあらざりけらし。

それをかのみめ男、うち物語らひて、かへり来て、いかが思ひけむ、時は三月のついたち、雨そほふるにやりける。

おきもせず寝もせで夜を明かしては

春のもととてながめくらしつ

## 7. ま と め

「単元 一」においては、現代文の中に蜜にまつわる作品を挿入しながら読解を進める手法で古典教材の学習を進める手法をとった。

学習者からみると次はどのような作品が紹介されるかかなり興味を抱いたようである。

「単元 二」においては、古典を題材とした小文を用いて後から紹介する古典教材への理解と伊勢物語の前半部分の各章段理解への足かかりとなることを目的とした。

先述した大学初年次教育・基礎教養科目として学生の言語活動の充実を目指すものであるが同時に日本の伝統文芸に接することにより深い学びの一助となることを期している。

### 文献一覧

- 片桐洋一, 福井貞助, 高橋正治, 清水好子 (1972). 『日本古典文学全集 竹取物語伊勢物語 大和物語 平中物語』, 小学館, 134 頁, 168~167 頁, 172 頁, 294~295 頁.
- 文部科学省 (2012). 『古典の日に関する法律の施行について (通知)』, 24 庁房第 168 号, 平成 24 年 9 月 5 日.